

豊田市郷上遺跡出土の土師器煮炊具に関する予察

鈴木正貴

1 はじめに

愛知県豊田市鴛鴨町に所在する郷上遺跡は、古墳時代から江戸時代前半まで継続する複合遺跡である。特に、戦国時代から江戸時代前半までの期間では、溝で囲まれた方形区画が多数検出されており、この区画内には掘立柱建物や井戸などが展開する。遺跡の性格は、付近に集落の核となる城館や寺社はなく、矢作川流域に展開した一般的な集落として位置付けられよう。

ここでは、この戦国時代から江戸時代にかけての郷上遺跡を理解するための前段階の分析として、本遺跡から最も多量に出土した遺物である土師器の煮炊具を検討する。もとより、発掘調査は今後も予定されており、整理作業も中途の状態であるが、本稿で分析の見通しを立てたいと考えた次第である。

2 研究史

東海地方における戦国時代を中心とした土師器煮炊具は、丸底の羽付鍋・内耳鍋・釜・焙烙を中心に展開する。これらの研究は、1980年代後半から足立順司（足立1987）・佐藤公保（佐藤1988）らによって進められ、その後の研究成果は第4回東海考古学フォーラム『鍋と甕—そのデザイン—』で集約されている。筆者はこの中で、尾張・西三河・東三河・遠江の各地域の様相を検討した（鈴木1996a）上で、「15世紀中葉以降の土師器煮炊具は旧国よりも狭い範囲で在地生産され、形を模倣することで各地域間に影響関係が認められる」と推察した（鈴木1996b）。

一方、郷上遺跡が所在する西三河においては、戦国時代の土師器煮炊具のまとまった研究は少なく、尾野善裕の検討（尾野1992）や西尾城遺跡出

土資料を用いた分析（鈴木1997）などがあるに過ぎない。筆者は前稿（鈴木1997）で、土師器内耳鍋を5類に分類し、東三河・遠江固有の形式と思われるくの字形内耳鍋が徐々に駆逐され、西三河固有の形式と思われる内彎形内耳鍋が台頭していくことを推測した。しかし、この分析も西尾城遺跡の1遺跡のみで西三河全体を論じたものであり、はじめから資料的な限界があった。

3 郷上遺跡出土土師器煮炊具の分類

筆者は形態と機能の相関関係を重視する立場を取り、鉢の形状をした煮炊具を鍋、壺の形状をしたものを釜、浅鉢の形状をしたものを焙烙と呼んでいる（鈴木1994a・鈴木1996a）。したがって器種分類は、まず羽付鍋・内耳鍋・焙烙・羽付釜・羽無釜の5類に大別し、口縁部の形状などで細分を試みた。

羽付鍋A類 腰の張った半球形ないし偏球形の体部で、口縁部直下に鑊がつくもの。体部外面にハケ調整が施される。北村分類（北村1996）の羽釜A、筆者が仮称した内彎型羽釜（鈴木1996c）に相当する。

羽付鍋B類 半球形の体部で口縁部直下に鑊が回る形態のもの。口縁部が体部に比べやや肥厚し、鑊は比較的短い。体部外面は原則として指オサエまたはナデ調整である。北村分類の羽釜B、筆者が仮称した戦国型羽釜（羽付鍋）に相当する。口縁部と鑊の形状から4類に細分した。

羽付鍋B1類 口縁部が内彎ぎみに直立し、口縁部の高さや鑊の長さが長いもの。

羽付鍋B 2類 口縁部が内彎ぎみに内傾し、口縁部の高さや鑊の長さが長く、端部が肥厚するもの。

羽付鍋B 3類 口縁部がやや内彎・内傾し、鑊の突出が比較的短く厚いもの。

羽付鍋B 4類 口縁部が内彎するもので、鑊の突出が退化して非常に短くなったもの。

羽付鍋C類 直立する口縁部直下に鑊が回り、鑊の長さが長いもの。体部と口縁部の器壁の厚さはほぼ同一となる。

内耳鍋A類 半球形の体部に外反する口縁部がつくもの。内面にある稜は明瞭である。口縁端部は一旦粘土を外側へ折り返した後にナデており、口縁端部の器壁は玉縁状に肥厚している。

内耳鍋B類 半球形の体部に、そこからわずかに外側に屈曲させた口縁部がつくもの。体部と口縁部の境界部分には、内面に1段の稜線が認められる。口縁端部の形状などから3類に区分した。

内耳鍋B 1類 口縁部がやや直線的に開き、口縁端部の断面形は方形となるもの。

内耳鍋B 2類 口縁部がやや直線的に直立し、口縁部端面をやや強くナデているもの。

内耳鍋B 3類 口縁部と体部の屈曲が緩やかになり、内面にある稜線がやや不明瞭になるもの。

内耳鍋C類 半球形の体部にやや受口状の口縁部がつくもの。体部と口縁部の境界部分には、内

面に2段の稜線が存在し、外面は強い横ナデが施されている。口縁部は内彎しながら外傾する。

内耳鍋D類 体部が逆ハの字状に開いて直線的に伸び、そのまま口縁部に至るもの。

内耳鍋E類 体部が逆ハの字状に開いてやや内彎するもの。浅い皿状の底部と体部の境にある稜は不明瞭となっている。

焙烙 丸底の浅い鉢形の形態で、口縁部に近い部分に内耳がつくもの。

羽付釜 体部中央に鑊が回る壺型煮炊具。耳は粘土紐を用いて作るもののみが確認された。

羽無釜 体部に鑊を持たない壺型煮炊具。今回の分析では確実な資料を見出すことはできなかった。

4 資料の紹介

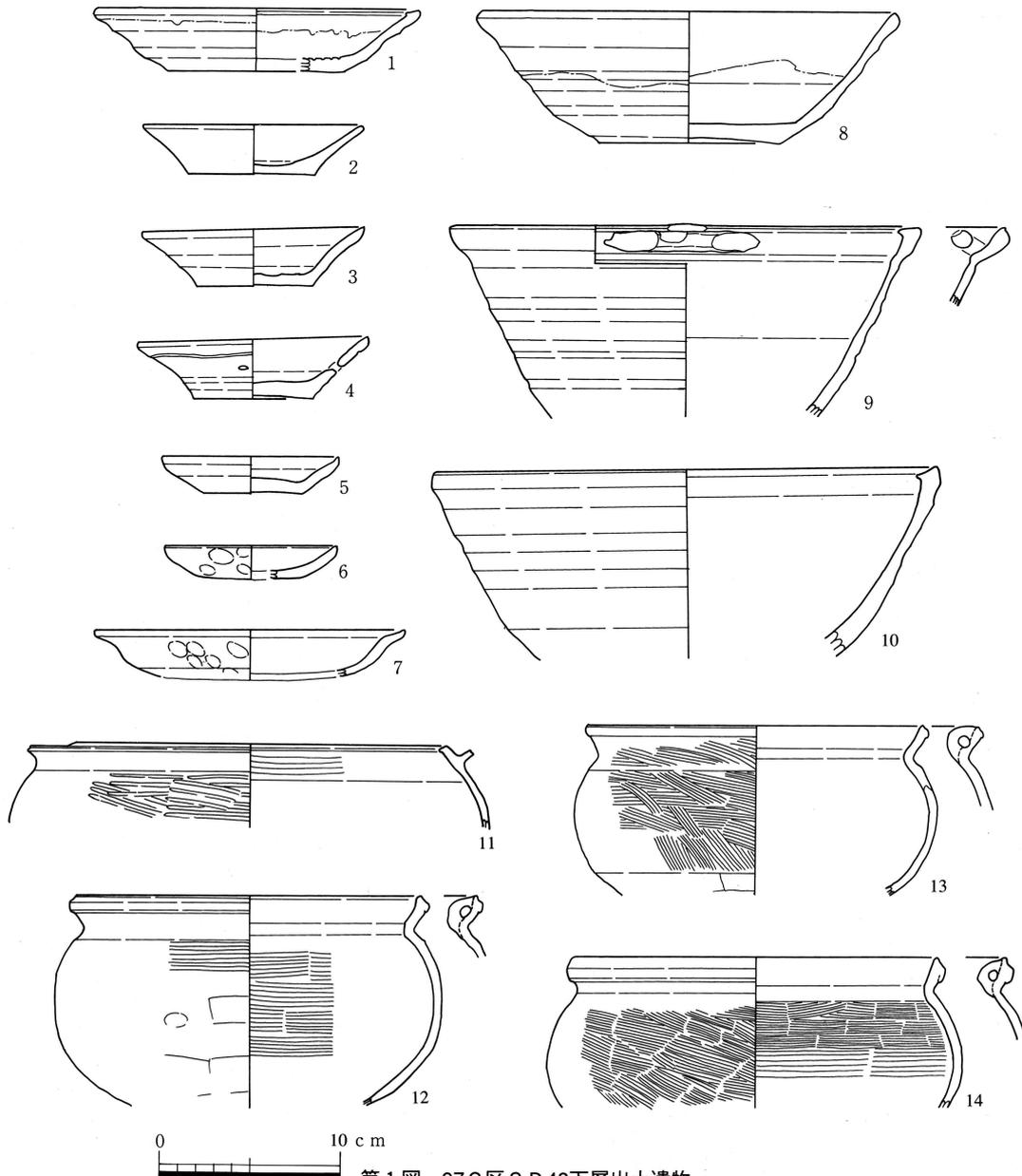
ここで紹介する資料は全て溝出土資料である。溝は重複する機会が多いため新旧の遺物が混入しやすく、資料数も膨大である。このため、この資料紹介は部分的なものであることをあらかじめ断わっておく。

(1) 97C区SD48下層出土遺物(第1図)

97C区SD48下層から出土した遺物には、古瀬戸後Ⅳ期古段階(藤澤1991)を中心とした瀬戸美濃窯産陶器や土師器などがある。土師器にはロクロ調整皿(2~5)、非ロクロ調整皿(6・7)、羽付鍋A類、内耳鍋A類、羽付釜などがある。土師器煮炊具の中では内耳鍋A類が大多数を占め、瀬戸美濃窯産陶器内耳鍋(9・10)も若干量が認められる。

羽付鍋A類(11)は短く上方に突出した鑊が付き、口縁部はかなり内傾化する。体部外面に粗いハケ調整が施されている。北村分類の羽釜A4類に相当する。内耳鍋A類(12~14)は口縁端部を外側に折り返し玉縁状にするもので、体部外面にはやや強いハケ調整、底部外面にはヘラケズリ調

整が施され、内面は弱いハケ調整が施されているかまたは調整痕が認められない。胎土は黄白色で焼成は概して良好である。この内耳鍋A類は東三河や遠江でよく見られる「くの字形内耳鍋」にきわめて類似している。これらの資料は15世紀中葉に位置付けられる。



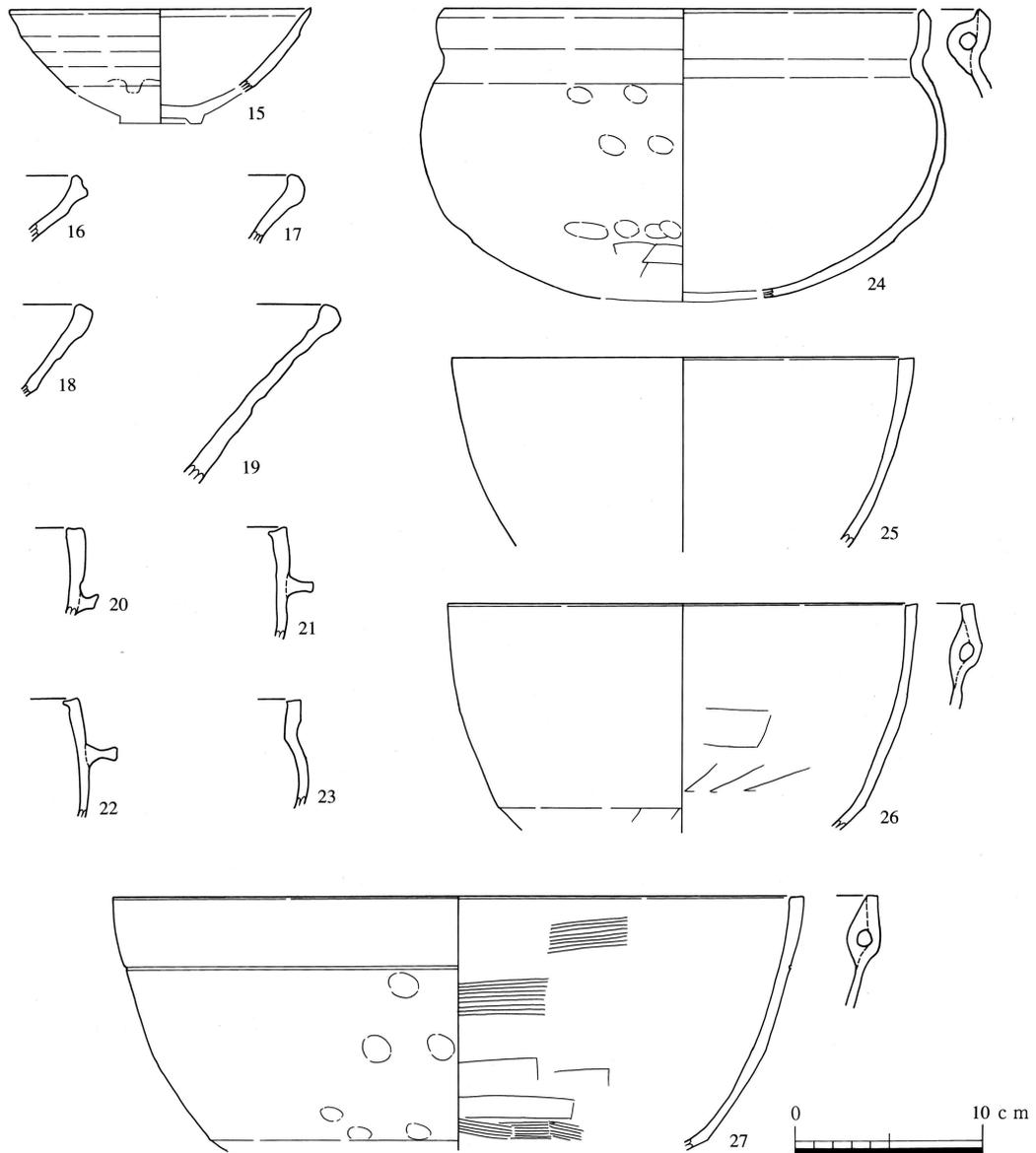
第1図 97C区SD48下層出土遺物

(2) 97A区SD11出土遺物 (第2図)

97A区SD11から出土した遺物には、古瀬戸後IV期新段階～大窯第1段階(藤澤1993)に属する瀬戸美濃窯産陶器(15～19)・常滑窯産陶器や土師器などがある。土師器にはロクロ調整皿、非ロクロ調整皿、羽付鍋B類、内耳鍋B類、内耳鍋C類、内耳鍋D類、羽付釜などがある。土師器煮炊具は量的に少ないが、羽付鍋B類や内耳鍋D類が比較的多い。内耳鍋A類もわずかに認められる。

羽付鍋B類は多くがB1類に属し、21・22は口

縁部端面を強くナデ内側に粘土がはみ出している。20は口縁部が直立するが、鐔が短めである。内耳鍋B類は、B1類(23)とB2類があるが、23は口縁部の立ち上がりが低いものである。内耳鍋C類(24)は口縁端部の断面形が三角形状になっている。内耳鍋D類(25～27)は口縁部がやや開きぎみに直立しており、体部外面に浅い沈線が巡るもの(27)もある。これらの資料は15世紀後葉から16世紀前葉に位置付けられる。



第2図 97A区SD11出土遺物

(3) 97C区SD05出土遺物 (第3図)

97C区SD05から出土した遺物には、大窯第1段階～第3段階に属する瀬戸美濃窯産陶器(28・30・31)・中国産磁器(29)や土師器などがある。土師器には、ロクロ調整皿(33～35)、非ロクロ調整皿(32)、羽付鍋B類、羽付鍋C類、内耳鍋B類、内耳鍋D類、内耳鍋E類、羽付釜などがある。土師器煮炊具の出土量は非常に多いが、その中では羽付鍋B類、内耳鍋B類、内耳鍋D類が多い。

羽付鍋B類は、口縁部が内傾するB2類(46～48)が多く、B3類(49)も存在する。これらは口縁部端面を強くナデて粘土が内外面両側にはみ出しているものが多い。46は内面に内耳を持つ「羽付内耳鍋」で、他の羽付鍋B類よりも口径が小さくなる。内耳は接近した位置に2箇所存在することが確認され、合計3箇所に内耳がついたものと推測される。口縁部外面に刺突が施されるもの(47)もある。羽付鍋C類(40)も若干量認められる。内耳鍋B類の口縁部にはさまざまな形状が認められ、B1類(36・38・42)とB2類(37・43)に分かれる。また、口縁部と体部の境の屈曲が緩いもの(37・38・43)と強いもの(36・42)にも分けることができる。内耳鍋D類は体部がやや内彎するもの(39)が多く、口縁部が肥厚するもの(44)もある。内耳鍋E類(45)は内面にハケ調整を持ち、口縁端部の断面形は方形で特に肥厚しないものである。羽付釜(41)は口縁部が残存していないが、鏝が長いことから比較的古いものと考えられる。これらの資料は16世紀前葉から16世紀後葉に位置付けられる。

(4) 97C区SD12出土遺物 (第4図)

97C区SD12から出土した遺物には、大窯～連房式登窯第4小期(藤澤1987～1989)に属する時期幅が広い瀬戸美濃窯産陶器(50～52・55～58)

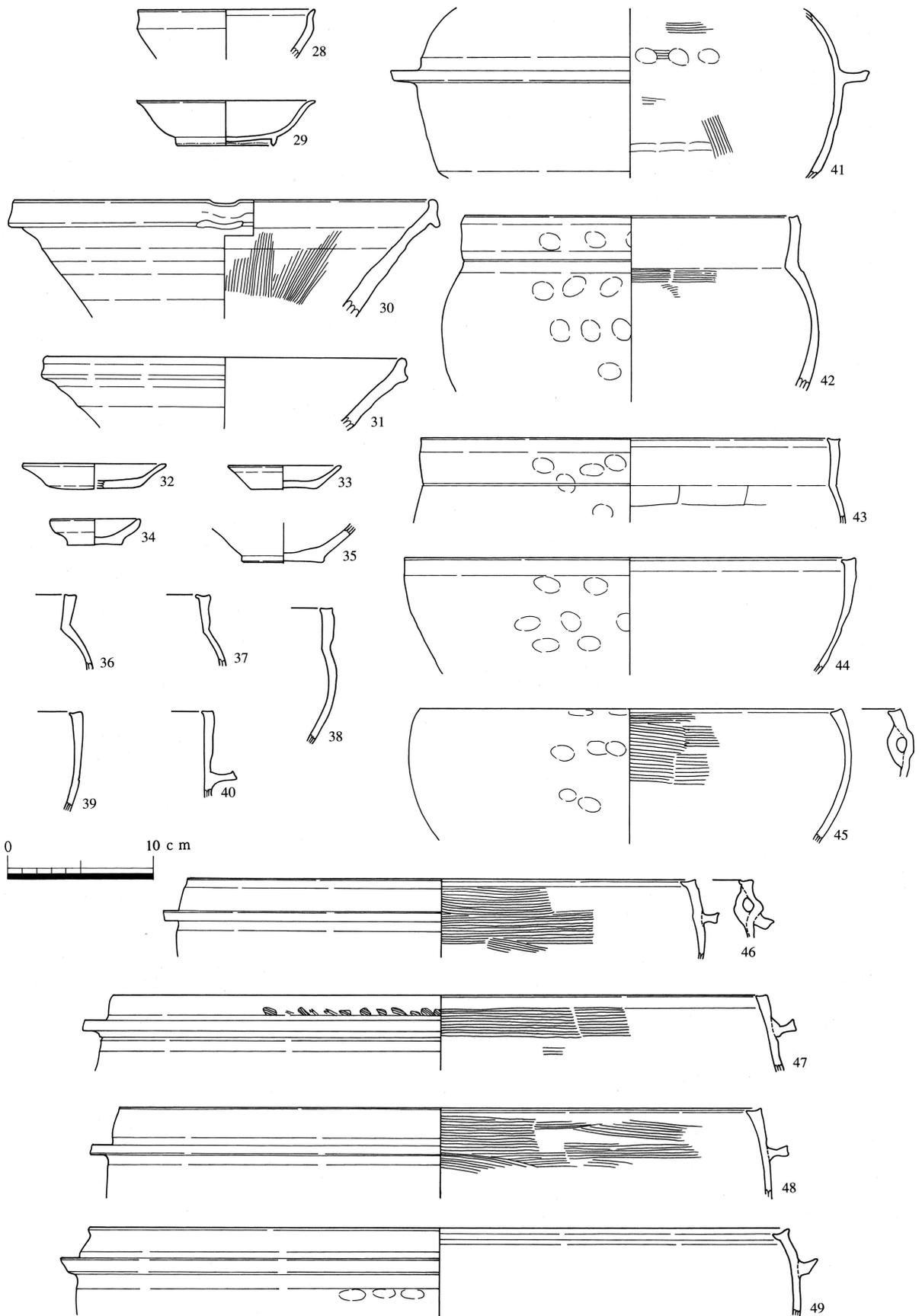
がある。土師器には、ロクロ調整皿(53)、非ロクロ調整皿(54)、羽付鍋B類、羽付鍋C類、内耳鍋B類、内耳鍋C類、内耳鍋D類、内耳鍋E類、羽付釜などさまざまな器種が混在している。土師器煮炊具の中では羽付鍋B類や内耳鍋B類と内耳鍋E類が多く、焙烙は現在のところ認められない。

羽付鍋B類には、B3類(67・68)などがある。67は鏝の端面をナデて下端が内側に傾斜しており、68は口縁部が内傾してB4類に近い形態である。羽付鍋C類(69)も若干量認められる。内耳鍋B類は、体部内面に施されたハケ調整がやや上方まで達し、口縁部との境界が不明瞭となるB3類(59・65)が多くなる。内耳鍋C類(60)は口縁端部外側のナデがさらに強くなっている。内耳鍋D類は器壁がやや厚く体部が内彎するもの(62)があり、内耳鍋E類(61・63)も存在する。羽付釜(66)は粘土紐を用いて外耳を付け、鏝が長いものである。これらの資料は17世紀前半を中心に16～17世紀全般に及ぶと考えられる。

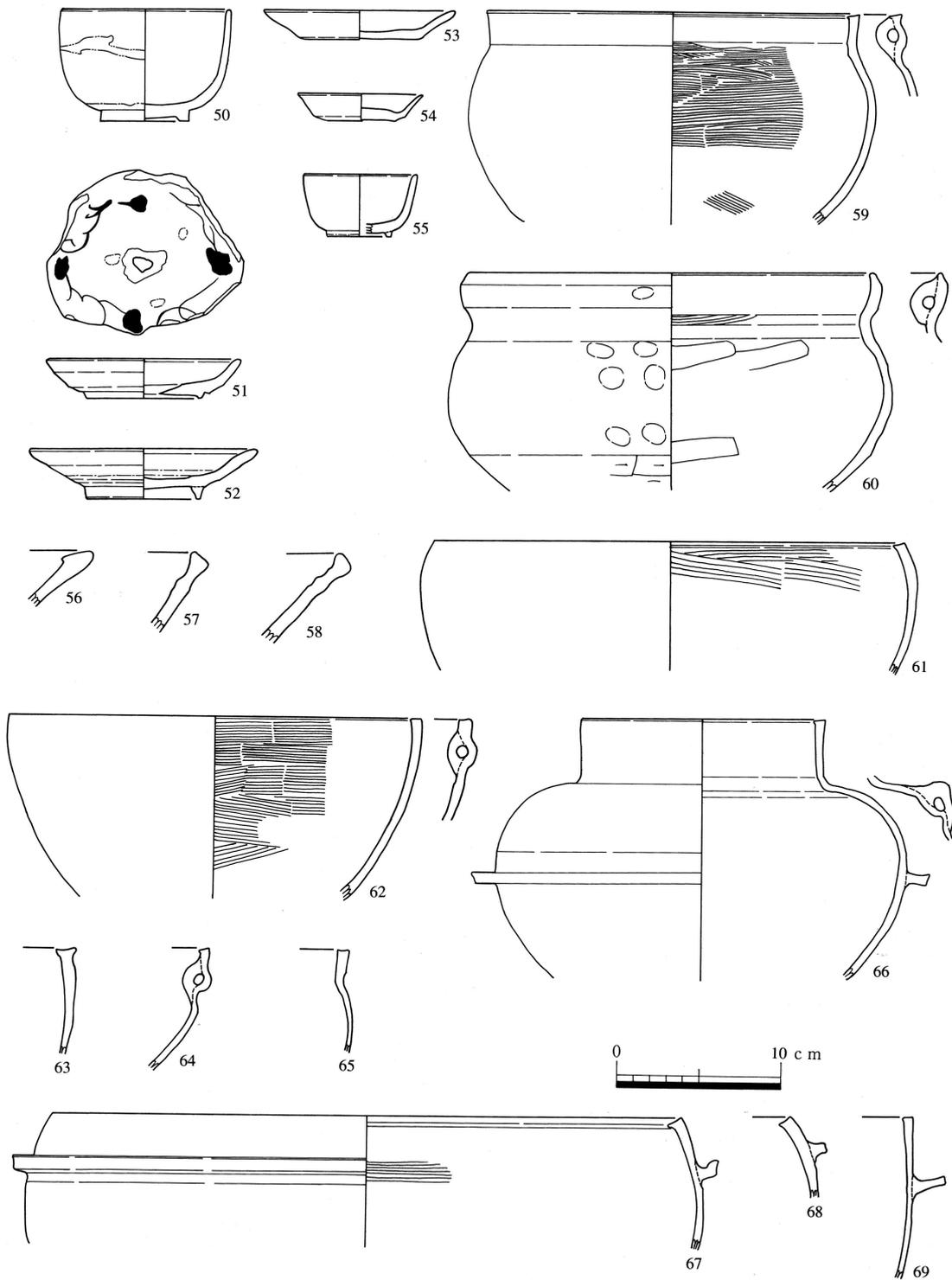
(5) 97A区SD03出土遺物 (第5図)

97A区SD03から出土した遺物には、連房式登窯第7小期までに属する瀬戸美濃窯産陶器(70～75)や土師器などがある。土師器には、ロクロ調整皿(76)、羽付鍋B類、内耳鍋B類、内耳鍋E類、焙烙などがある。土師器煮炊具の中では内耳鍋E類または焙烙が多く、内耳鍋C類と内耳鍋D類は認められない。

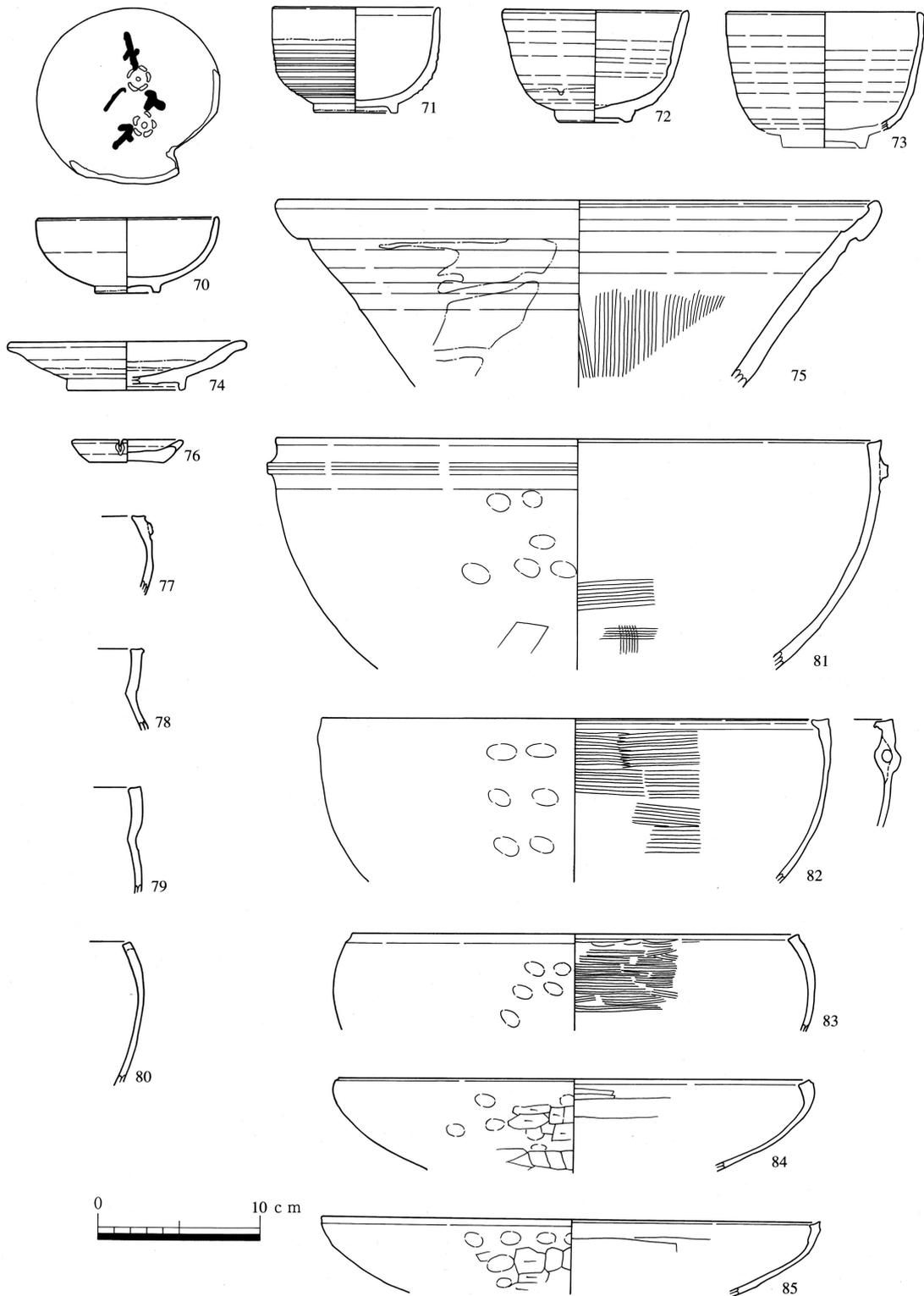
羽付鍋B類には、鏝が著しく短くなるB4類(77・81)がある。羽付鍋B1～3類は口径が40cmを超えるが、B4類は口径が40cm以下と小さくなっている。内耳鍋B類(78・79)は混入の可能性もある。内耳鍋E類(80・82・83)は、口縁部の内傾化が進んでいる。焙烙は口縁部が内傾して端部が肥厚するもの(84)と口縁部が直立するも



第3図 97C区S D05出土遺物



第4図 97C区S D12出土遺物



第5図 97A区S D03出土遺物

の(85)がある。これらの資料は18世紀中葉に位置付けられる。

5 考察

(1) 郷上遺跡出土土師器煮炊具の変遷

まず、各器種の型式学的な変化を考える。ここでは、比較的資料数が多く長い期間使用された羽付鍋B類と内耳鍋B類についてのみ検討する。羽付鍋B類はB1類～B4類に分類され、これらは口縁部と鏝の長さが短くなり、口縁部が内彎・内傾する傾向からみて、B1類からB4類へ変化したと考えられる。一方、内耳鍋B類はB1類～B3類に分類され、口縁部と体部の境界部分の形状がシャープでなくなる傾向からみて、B1類からB3類へ変化したと考えられる。

これらの器形変化と遺構一括資料の共伴関係をもとに、暫定的な変遷案を提示する(第6図)。

- 1期 羽付鍋A類と内耳鍋A類と羽付釜が主体となる。97C区SD48下層出土遺物を基準とする。
- 2期 羽付鍋B類と内耳鍋B類・C類・D類・E類と羽付釜などが存在する。2期は羽付鍋B類と内耳鍋の形状から3小期に区分できる。
- 2a期 羽付鍋B1類と内耳鍋B1類が存在する。97A区SD11出土遺物を基準とする。

- 2b期 羽付鍋B2類と内耳鍋B2類が存在する。97C区SD05出土遺物を基準とする。
- 2c期 羽付鍋B3類と内耳鍋B3類が存在する。97C区SD12出土遺物新相を基準とする。
- 3期 羽付鍋B4類と内耳鍋B類・E類と焙烙などが存在する。97A区SD03出土遺物を基準とする。

この結果、15世紀後葉と17～18世紀に2つの画期が認められる。前者は多様な形状の内耳鍋が出現する画期、後者は焙烙が出現する画期である。

(2) 器種の対応関係

次に、筆者が既に報告した西尾城遺跡出土土師器煮炊具(鈴木1996a)との対応関係を整理しておく(第1表)。なお、名称は器種名の頭に遺跡名を付けて「郷上内耳鍋A類」などと称することとする。

筆者は以前、西尾城内耳鍋B類を西三河で模倣された「くの字形内耳鍋」と評価した(鈴木1997)。郷上内耳鍋C類がそれに該当するが、東三河や遠江で出土するものとは口縁部の折り返しと体部のハケ調整の2点で大きく異なる。本来別の名称を付与するのが適切かと思われるが、ここでは郷上内耳鍋A類を東三河遠江型と、郷上内耳鍋C類を西三河型と分けて仮称することとした。

郷上羽付鍋A類		(内彎型羽付鍋)
郷上羽付鍋B類	西尾城羽付鍋	(戦国型羽付鍋)
郷上羽付鍋C類		
郷上内耳鍋A類		(東三河遠江型のくの字形内耳鍋)
郷上内耳鍋B類	西尾城内耳鍋A類	(内彎形内耳鍋)
郷上内耳鍋C類	西尾城内耳鍋B類	(西三河型のくの字形内耳鍋)
	西尾城内耳鍋C類	
郷上内耳鍋D類	西尾城内耳鍋D類	(半球形内耳鍋)
郷上内耳鍋E類	西尾城内耳鍋E類	(半球形内耳鍋)
郷上羽付釜類	西尾城羽付釜	

第1表 器種対照表

(3) 西三河の内耳鍋出現期の様相

以上の分析から、郷上遺跡で最初に出現した内耳鍋は郷上内耳鍋A類（東三河遠江型くの字形内耳鍋）である。西三河でも最初に東三河遠江型くの字形内耳鍋が出現する点は西尾市室遺跡の事例（川井他1994）から既に指摘されていた（尾野1997）。筆者は、東三河遠江型くの字形内耳鍋が出土する遺跡とその他の内耳鍋が展開する遺跡が異なっていたため、この相違が時期差であると考えられることを保留し、15世紀後葉に内彎形内耳鍋、西三河型くの字形内耳鍋、半球形内耳鍋が突然出現するとしていた（鈴木1996a）。しかし、郷上遺跡の様相を見ると、これは適切ではなかったといえよう。

したがって、西三河においても、東三河や遠江と同様に、内耳鍋は外面にハケ調整を持つ東三河遠江型くの字形内耳鍋が最初に出現したといえる。そして、東三河や遠江とは相違して、15世紀後葉に突然異なる形式群に全く変化してしまう点、西三河における特徴である。このことは、東から導入された外来系内耳鍋を独自の「西三河型」ともいべき土師器煮炊具群に転換したものと評価できよう。この「西三河型土師器煮炊具群」の器種構成は、戦国型羽付鍋、内彎形内耳鍋、西三河型くの字形内耳鍋、半球形内耳鍋、羽付釜のセットという豊富なものであった。その中でも、くの字形内耳鍋が東三河遠江の、半球形内耳鍋は尾張の影響を強く受けたものと考えられる。「西三河型土師器煮炊具群」はさまざまな系譜を持つ煮炊具が組み合わさっており、その歴史的な意義が今後問題となるであろう。

(4) 郷上遺跡における土師器煮炊具組成の特徴

以上、西三河の土師器煮炊具を概観したが、その中での郷上遺跡における組成的な特徴を検討しておく。特徴は3点に要約できる。

第1点は、羽付鍋の比率が各時期を通じて高い点である。清須（鈴木1994b）と西尾城遺跡（鈴木1997）における土師器煮炊具の中で羽付鍋の占める割合は1割以下と非常に低いのに対し、郷上遺跡では羽付鍋と内耳鍋は互角に近い量が出土しているという印象がある。また、郷上遺跡では18世紀代においても羽付鍋が一定量出土し、型式学的な変化をみせる点も特徴的である。

第2点は、内彎形内耳鍋の比率が古い段階から高く、西三河型くの字形内耳鍋が少ない点である。西尾城遺跡では16世紀中葉まで西尾城内耳鍋B類（西三河型くの字形内耳鍋）が多く（鈴木1997）、西尾市清水遺跡（酒井1991）でも西三河型くの字形内耳鍋が多数を占めているのとは対称的である。

第3点は、焙烙が18世紀まで出現しない点である。単に16・17世紀の焙烙が抽出されていない可能性も残されているが、16世紀後葉には一定量出土する清須とは異なった状況といえる。

6 まとめ

郷上遺跡の土師器煮炊具の変遷の中で、郷上内耳鍋A類の消滅と焙烙の出現という2つの画期が認められた。また、尾張や東三河とはもちろん、西尾城遺跡とも異なる器種組成を呈していることが明らかとなってきた。このことから、西三河における戦国時代から江戸時代にかけての土師器煮炊具の様相は複雑な状況であったと推定される。しかし、資料調査は未だ十分とは言えない状況であり、残された課題も多い。郷上遺跡の調査を進展させるとともに、各地の遺跡の資料を収集する必要性を痛感している次第である。

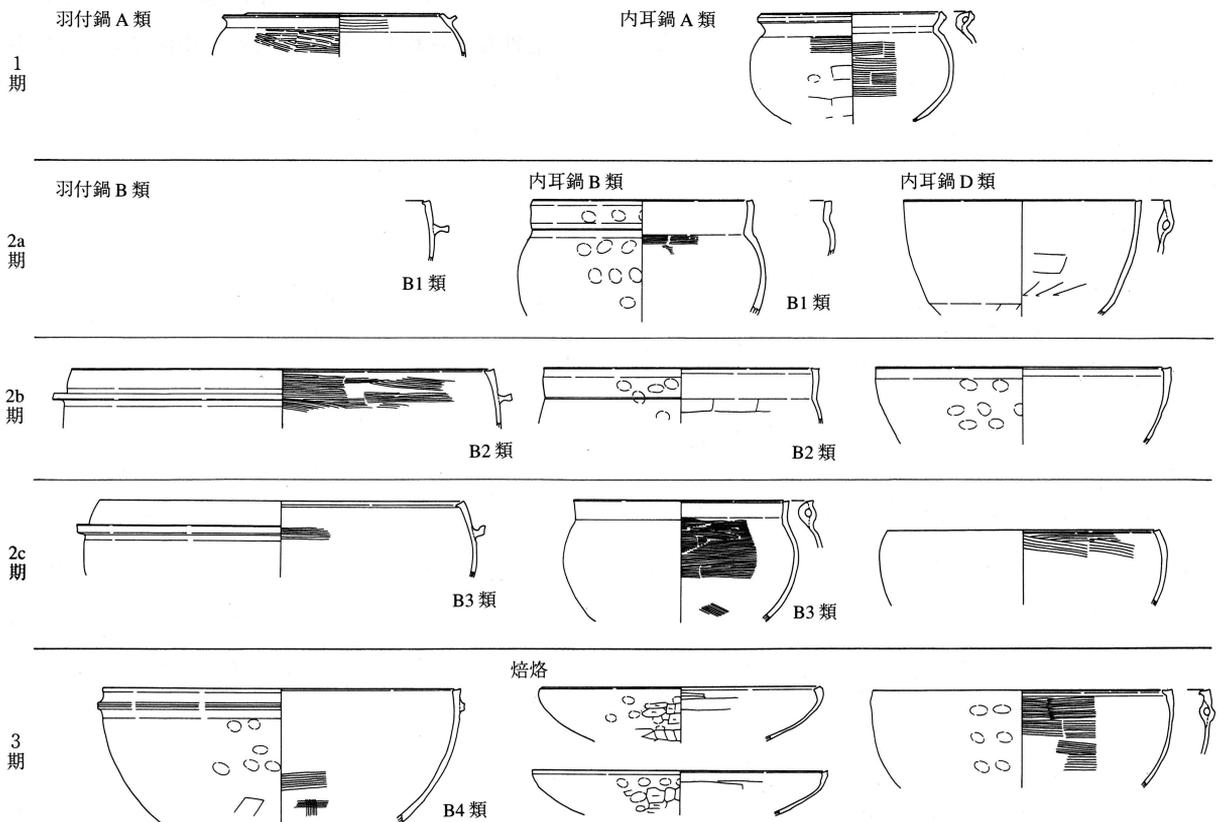
最後に、本稿をまとめるにあたり、足立順司・伊藤裕偉・内堀信雄・尾野善裕・恩田裕之・金子健一・北村和宏・藤澤良祐・森泰通の各氏の他、

郷上遺跡の調査担当者（赤塚次郎・伊藤秀紀・加藤博紀・木下一・酒井俊彦・樋上昇）からもさまざまなご教示を得た。記して感謝します。

文献

足立順司 1987 「内耳鍋の研究」『研究紀要Ⅱ』
 (財)静岡県埋蔵文化財研究所
 尾野善裕 1992 「三河の煮炊具—「く」の字型」内耳鍋を中心に」『愛知考古学談話会発表資料』
 尾野善裕 1997 「中世食器の地域性—東海・濃飛」『国立歴史民俗博物館研究報告第71集』
 川井啓介他 1994 『室遺跡』
 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第49集
 北村和宏 1996 「尾張平野における鎌倉・室町時代の煮沸具の編年」『年報平成7年度』
 (財)愛知県埋蔵文化財センター
 酒井俊彦他 1991 『清水遺跡』
 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第25集

佐藤公保 1988 「尾張の土師器煮炊具—15～17世紀を中心に」『マージナルNo.9』
 鈴木正貴 1994a 「戦国時代における尾張型煮炊具の歴史的様相」『考古学フォーラム4』
 鈴木正貴他 1994b 『清洲城下町遺跡Ⅳ』
 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第53集
 鈴木正貴 1996a 「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム
 鈴木正貴 1996b 「東海地方の土師器内耳鍋の生産について」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム
 鈴木正貴 1996c 「総論 東海地方の中世から近世の煮沸具の様相と諸問題」『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム
 鈴木正貴 1997 「西尾城跡出土の土師器煮炊具」『三河考古第10号』
 藤澤良祐 1987～1989 『研究紀要Ⅵ～Ⅷ』瀬戸市歴史民俗資料館
 藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群Ⅱ—古瀬戸後期様式の編年—」『研究紀要Ⅹ』瀬戸市歴史民俗資料館
 藤澤良祐 1993 『瀬戸市史 陶磁史篇Ⅳ』



第6図 郷上遺跡出土土師器鍋類変遷図(1:8)